

看護研究から政策を うみだすために

いまから2年前、我々は大学院のゼミにおいて1冊の本を輪読した。それが、『Shaping Health Policy through Nursing Research』である。教員の1人が留学中、米国の研究者から紹介された書籍であるが、読み終わって我々は、ぜひ、広く他の看護研究者にも伝えたい内容であると強く感じた。

さらに偶然ではあるが、東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科の国際看護開発学分野において、この書籍の著者の1人でありNINR(National Institute of Nursing Research)のトップであったGrady博士と、本学での大学院授業などを通じて継続的なつながりがあったことから、本企画において著者からのメッセージを執筆していただくに至った。この企画は、こうした書籍との出会いや人と人とのつながりによって実現した。特にご多忙の中、快くご協力くださったGrady博士には心から感謝している。改めて御礼申し上げたい。

では、なぜいまこの企画なのかについて考えてみたい。

最初にお伝えしたいことは、本書籍に示されている研究や活動から学び、日本の看護学の研究者として活かせる部分を活かしていこう、という意図の企画であることである。類似した研究を、これらに続けて行なおうというものではない。また、NINRのような組織を日本に持ち込むことが無条件によいといっているわけでもない。

本特集を企画した背景の1つには、看護研究者には、政策をうみだす研究が求められているのではないかと、ということがある。政策や制度の隙間にはまり、十分なケアが受けられていないような人を

どう救うのかといった、現実を改善していくための研究が必要ではないだろうか。そうした研究を行なうには、政策を十分に知り、そこから漏れている人々を見いだす鋭い感覚や、アセスメント力に基づくテーマ設定が重要である。研究者1人ひとりが、そうした重要なテーマに気づくための感覚を鋭くしておくことが重要ではないかと考えている。

また、自分の興味や関心のみに基づく研究では、研究者個人の満足は得られても、Health Policy にはその成果がなかなか届かない。研究成果をどのように活かしていくのかをあらかじめ意識した研究が求められているのではないかということもある。

本書籍の中で紹介されている研究の多くは、貧困層などの弱い立場の人々(周辺化された人々)を救おうという強い意気込みと決意に基づく研究である。いずれも、各研究者がライフワークとして取り組んだ研究を網羅する大作である。実現したい強いビジョンがあり、そのビジョンに基づく生涯の研究テーマがあることは、研究者としての強みとなると考えられる。

『Shaping Health Policy through Nursing Research』には、上記のような点に気づく重要なヒントがたくさん示されている。本書籍を通じてこうした点に気づかされたことが、本企画の着想の原点にある。

本特集の趣旨は書籍の単なる紹介ではない。本書籍の内容をヒントとし、看護研究から政策をうみだすとはどういうことなのか、そ

して研究者には何が求められ、そうした研究課題をどう見だし、研究を実施していくとよいのかを考えていくことが、本特集の骨子である。

そこで本企画は、二部構成とした。前半は、『Shaping Health Policy through Nursing Research』に関する内容である。著者からのメッセージやNINRの歴史とその役割・現状、また、書籍の中ではさまざまなテーマが取り上げられているが、その中から、現在の日本の現状にも示唆が大きいであろう“退院支援”をピックアップし、日本における関連研究の実態とあわせて紹介する。後半はわが国に焦点を当て、政策をうみだすための看護研究の実践例や看護研究者養成につながる行政官の活動例、また現在、実際に政策に携わる議員という立場から寄せられた看護学研究者への期待が示される。

本企画を通じて、明確なビジョンに基づく、現実を改善していくような政策をうみだす研究が1つでも多く世にうみだされていくことを祈っている。

企画：緒方泰子(東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科教授)

深堀浩樹(同 准教授)

丸 光恵(甲南女子大学看護リハビリテーション学部教授)